

選考委員会総評

大石芳野（おおいし よしの）

ウクライナが攻撃されたことは、私たち日本人全体に大きな打撃となった。2014年からクレミアや東側のドンバスが攻撃された以降に私はウクライナへ行ったものの、チェルノブイリの取材が主で、戦場に行く機会に恵まれなかった。2020年、ウクライナへの渡航を具体的に計画した直後にコロナのパンデミックが続き、先延ばししているうちにキーウが2022年に攻撃され愕然とした。

多くの人がウクライナの人たちを精神的に援助したいとコンサートを開くなどの広がりが見られたなか、佐々木康さんは現地に飛んで撮影に挑んだ。そのエネルギーと行動力をもって構えたカメラで、戦場を撮りまくったのだろうが、深く考えながらシャッターを切る冷静さ、さらに写真化するという確かな腕がこの一冊から感じられる。

どの写真にもピントが良く、その半面、ブレた写真からは、怖い！と、撮影者が感じたであろうことが表れている。ウクライナが攻撃されている、しかも、それは至る地域で人びとがロシアの無謀さに苦しんでいる。そうしたひとつがヘルソンだということだろう。彼は現地の人たちと共に苦しみ、悲しみながら撮影したことがこの写真集から伝わってくる。

ウクライナには林檎もあり、その特産物のそばでも破裂した砲弾の煙が上がっているなど、戦争を人びとの日常の中で捉えている。戦争は命を奪うばかりか、住まいも文化も破壊してしまう姿を写真の力で伝えている。佐々木康さんは肝の据わった確かなフォトジャーナリストだと思いながらこの写真集を拝見した。

戦争が直ぐに終わることを切望すると同時に、受賞したこの写真集『ХЕРСОН – мисаилы падаюць на ноч』が終決へと繋がるためにも、多くの人たちに見てもらふことを願わずにはいられない。